

静岡県富士宮市

おおしかくぼ

史跡 大鹿窪遺跡

- 日本最古の縄文ムラ -



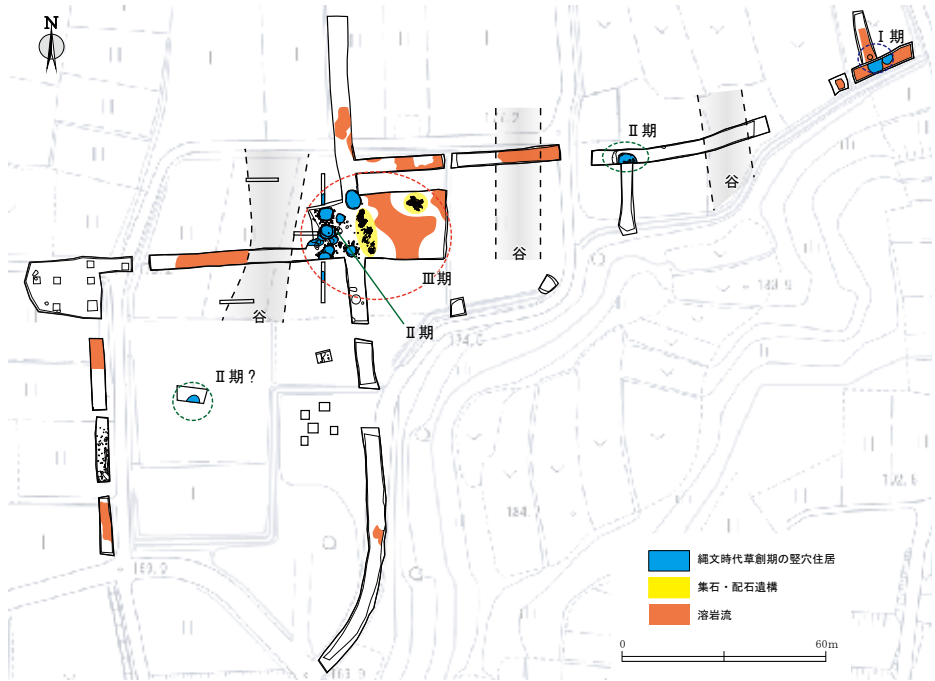
## 大鹿窪遺跡について

大鹿窪遺跡は、富士宮市大鹿窪に所在する、縄文時代草創期<sup>そうそうき</sup>～早期の集落遺跡です。これまでの調査によって、14基（指定当時）もの縄文時代草創期<sup>たてあなじゅうきよ</sup>の竪穴住居（土を掘り込んで作った住居）の痕跡が発見され、土器・石器などの遺物も多数発見されました。

このような遺跡は全国的に見てもとても珍しいものであり、縄文時代初期の定住開始段階における集落構造を知るうえで非常に貴重な遺跡であるとして、平成20年3月、国史跡に指定されました。

富士宮市では、遺跡の保存活用のため遺跡の整備を進めています。





大鹿窪遺跡の集落跡から見つかった竪穴住居跡群は馬蹄形（馬のひづめの形）を成しており、その中の広場から土坑（穴を掘った跡）、集石・配石遺構（石を集めて作った構造物）が見つかっています。

縄文時代草創期の遺構としては竪穴住居 15 基（令和 3 年 3 月時点）、竪穴状遺構 2 基、炉穴 2 基、集石遺構 14 基、配石遺構 8 基、土坑 9 基が検出されています。これらに伴って土器や石器が大量に出土しています。遺構から出土した土器の多くが押圧縄文土器であり、この形の土器が使用された時に集落が営まれたと考えられています。

集落跡は、東側を富士山の溶岩流に、東西を谷状地形に挟まれているため、非常に狭い範囲で居住が繰り返されていたと考えられます。

大鹿窪遺跡からは集落が営まれた時期よりも古い遺物と遺構も見つかっています。今後の発掘調査によって、さらに昔の人々の生活を解明することができるかもしれません。



配石遺構

## 縄文時代草創期とは

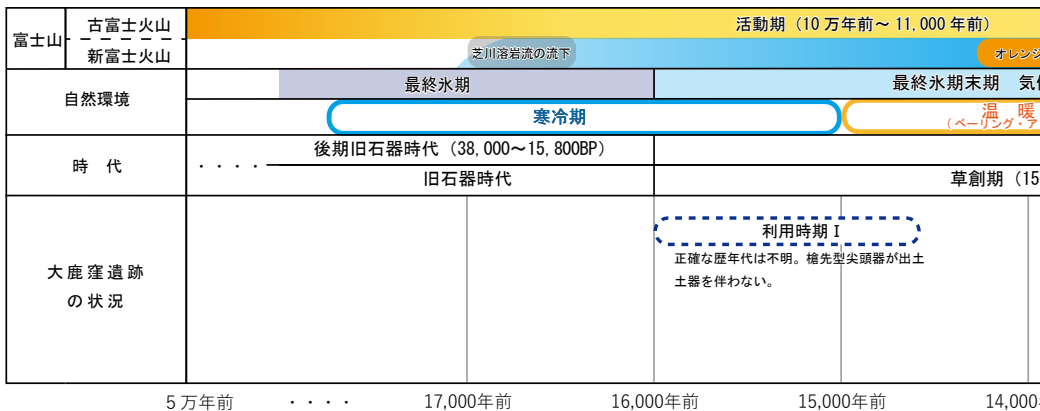
縄文時代は「水田稲作以前の土器をもつ採集を中心とした時代」です\*。  
旧石器時代にはなかった「土器」の発明により、生活が大きく変化しました。

縄文時代は1万年以上続きますが、出土する土器型式（土器の形）に基づいて、6時期（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）に区切られています。この中で最も古い時期が縄文時代草創期と呼ばれます。

草創期のはじめ頃（※15,000～13,000年前）は**氷河期の中でも少し暖かい時期**（晩氷期温暖期：ペーリング・アレード期）にあたります。この頃には日本列島全体で遺跡数が増加していきます。地域差はあるものの、九州さつなんしよとう薩南諸島から青森までの遺跡の分布がみられます。温暖化によって果実や木の実などの植物質食料を安定して得ることができるようになり、しだいに同じ場所に留まって生活をするようになりました。

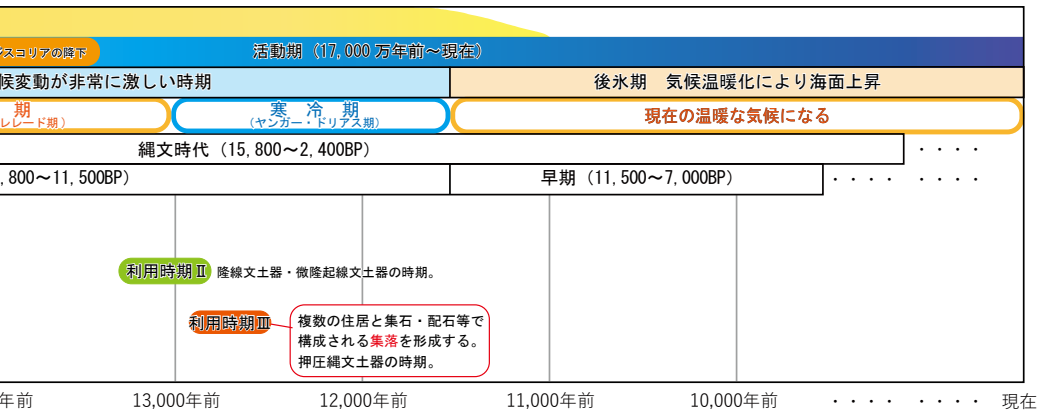
草創期の終わり頃（13,000～1,1500年前ごろ）は**温暖期**の後に**再び寒くなった時期**（ヤンガー・ドリアス期）にあたります。地球規模でこのような過酷な環境下にあったため、日本全体で遺跡数が激減しているという指摘があります。

そして、早期になると気候変動の少ない温暖な気候になり、安定した生活を送ることができるようになることで、生活構造が確立していきます。





草創期は縄文時代の他のどの時期にもみられないような大きな環境変化があった時期であり、人々は非常に厳しい環境の中で安定した生活を模索していました。その中で、複数の住居と集石・配石などの構造物が配置された『集落』を形成した大鹿窪遺跡は、他に先駆けて安定した生活をはじめた遺跡だと考えられています。 ※土器が出現した段階を縄文時代草創期のはじめと考える場合



## 大鹿窪遺跡から出土した遺物



りゅうせんもん  
隆線文土器

粘土紐を環状に貼り付けたシンプルなつくり。集落が営まれた頃よりも古い段階の土器。



びりゅうきせんもん  
微隆起線文土器

隆線文土器と同じころの土器。細い隆線を表面に貼り付けている土器。集落が営まれた頃よりも少し古い段階の土器。



爪形文土器

爪やへらなどで文様を付けている。集落が営まれた頃の土器。



おうあつじょうもん  
押圧縄文土器

棒状のものに縄を巻きつけて、幾何学文様をつけている。集落が営まれた頃の土器。最も多く出土している土器型式。



せきぞく  
石鏃

石の矢じり。弓矢をつかって狩猟をしていたことが分かる。



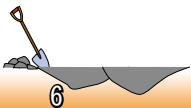
せんとうき  
尖頭器

石で作った槍の穂先。槍を使って狩猟をしていたことがわかる。



すりいし たたまいし  
磨石・敲石

木の実を磨り潰すなどして加工するために使う道具。



## 大鹿窪遺跡と富士山



大鹿窪遺跡では、北東方向に富士山を仰ぎ見ることができます。

大鹿窪遺跡の集落に人が住んでいた時は、現在の新富士火山ができたばかりの頃で、古富士がまだ見える状態だったと考えられています。

大鹿窪遺跡の集落のすぐ東側には新富士火山由来の溶岩流が広がっています。この溶岩流は集落がつくられるよりも前のもので、集石遺構や配石遺構はこの溶岩の礫れきを利用してつくっています。このことから、当時の人々にとって、この溶岩流は生活に密接な関係を持っていたことが想像できます。

近年の研究によって、大鹿窪遺跡が使われていた直前にも、富士山の噴火があった可能性が指摘されており、富士山から飛来したテフラ（火山噴出物）が生活していた当時の床面の土から見つかっています。



大鹿窪遺跡の土がオレンジ色に見えるのは、土に含まれるテフラ（火山噴出物）がオレンジ色をしているからなのです。



## 大鹿窪遺跡の整備について



現在、史跡大鹿窪遺跡は保護のために埋め戻してありますが、遺跡の重要性を後世に伝えて、将来にわたって遺跡を保護し活用していくために、富士宮市では遺跡の整備を計画しています。

史跡大鹿窪遺跡の価値を正しく理解することができるように「日常的な公園利用の中で縄文文化を体験・学習できる場」としての整備を行う予定です。整備では遺跡当時の地形の復元や竪穴住居の復元、集石遺構の復元を予定しています。

整備イメージ図



### アクセス

大鹿窪遺跡 所在地：富士宮市大鹿窪 1544 ほか

#### JR 富士宮駅から

- ・車で約 20 分（約 8km）
- ・バス【富士急行静岡バス】  
富士宮駅→大鹿新田または東村

#### JR 芝川駅から

- ・車で約 15 分（約 7km）
- ・バス【宮バス（旧芝川線）】  
芝川会館（芝川駅から徒歩 5 分）→新田